

宣 言

「人と自然が交わる滋賀・グリーン経済宣言」

令和3年3月26日

滋賀経済同友会
滋賀・グリーンディール研究会

目次

I. はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	P 3
II. 「人と自然が交わる滋賀・グリーン経済宣言」・・・・・・・・	P 4
III. 各社で「グリーン経済宣言」お考え下さい【ひな形】・・・・・・・・	P 5
IV. 各社で創る「グリーン経済宣言」への参考・・・・・・・・	P 6
【具体的にどういふことを心がければ良いのか：アイデア集】	
【具体的な事業案（例）】	
V. バックキャストイングのための付録・・・・・・・・	P 7
【人と自然が交わる2050年の滋賀の想像図】	
VI. 研究会の実施結果・・・・・・・・・・・・・・・・	P 9

I. はじめに

新型コロナウイルス感染症の流行により、私たちは「当たり前」が変わってしまう不安や戸惑いを様々な場面で抱いてきました。

世界が混乱に陥る中でも、気候危機や生物多様性の喪失など、地球規模の環境問題は深刻さを増しています。滋賀県においても 2018 年、2019 年と 2 年連続で琵琶湖の全層循環が滞るなど、自然からの警告は急を告げています。

今起きている現象はこれまでの「当たり前」の積み重ねの結果であり、言い換えれば、その延長線上には「持続可能な社会」はない、ということです。

私たちは、誰も生きたことのない時代に突入しようとしています。

増加の一途をたどっていた人口が減少する中で、これまでの社会が生み出した数々の課題を解決し、私たちはもとより、未来の世代も安全・安心に生きていくことができる希望ある世界をつくらなければならない。そのためには、これまでにない勇気ある変革が必要なのではないでしょうか？

変革への原動力は、誰もがつながり影響を及ぼし合える存在なのだという強い意識と、自覚です。“いのちの水”琵琶湖と共に暮らす私たちには、自然が単なる風景ではなく、精神・物質両面におけるよりどころであり、その恵みが人間を含むいのちの大切な基盤であることを感じる力があります。同時に、私たちにとっての琵琶湖のように、誰にとっても大切な故郷の自然があることにも思いを馳せ、行動することができます。

かけがえのない故郷を守り未来に引き継ぐために、私たち企業はどのような役割を果たしていくべきなのか。地域の力を見つめなおし、その力を環境と調和した形で引き出し、新たな社会像を結びなおすための経済をつくる。一人ひとりの意識を改革し、生活の質を高め、社会の格差の解消を目指していく。この「グリーン経済」をビジネスの中核として取り組むことは、これまで持続可能な社会実現のための歩みを続けてきた滋賀経済同友会にとって、今だからこそ踏み切れる未来への選択です。

私たちはこれまでに培った経験、知恵、つながり、そうした全ての資源を活用して、実現したい未来の社会像を大胆に描き、そこに至るための課題と道筋を明らかにしていきます。そしてグリーン経済の実現、人と文化の復興をこの滋賀の地から起こしていきます。

Ⅱ. 人と自然が交わる滋賀・グリーン経済宣言

琵琶湖を中心に豊かな自然に恵まれ、国内外のさまざまな地域とのつながりの中、売り手だけでなく、買い手、そして世間も含めてよしとするという「三方よし」の考えで、滋賀には古くから健全な商いが生まれ、それが成長し、日本経済を支えてきました。

一方で、地球と地域のサステナビリティの危機、コロナ禍、そして日本経済の転換期という三つの試練に同時に直面する中、私たちは滋賀から再び新たな考え方と経済モデルを作って発信していきたい、21世紀の近江商人へ進化したいと考えています。

私たちがこの地で長きにわたり事業を続けてこられたのは、それを支える6つの資本に恵まれていたからです。直面する問題を解決しながら、私たちの次の世代がさらにこの地で発展できるように、私たちは4つの原則を守り、6つの資本をさらに増やすことで、自然と社会が調和するグリーン経済を実現し、より豊かな滋賀を次世代に引き継いでいくことをここに宣言いたします。

《守るべき4つの原則》

1. 人が安全で健康、安心できることを最優先します。
2. 地域を重視し、地域が発展することを優先します。
3. 滋賀をより美しく、魅力的にしていきます。
4. 以上を行うために、滋賀経済同友会の中と外で協働します。

《増やすべき6つの資本》

一、 “地域でお金を回します”

【財務資本】

地域の中で回るお金を増やします。そのために、なるべく地域から調達し、地域から雇用します。

一、 “これからの産業を発展させます”

【製造資本】

持続可能なこれからの滋賀に必要な産業、特にグリーンな産業を発展させていきます。

一、 “知を発展させ、蓄積します”

【知的資本】

古くからの知恵に学び、研究開発を続け、知識や技術を蓄積させていきます。また、文化をより豊かにすることに努めます。

一、 “子どもも大人も育てます”

【人的資本】

子どもたちなど若い世代はもちろん、すべての人が生涯にわたって成長し続けられるよう、教育を充実させます。また、人の健康を守り、増進する事業を強化します。

一、 “社会と人の関係を強化します”

【社会・関係資本】

人々が安全に暮らせるためのハードウェアとしてのインフラの維持と、お互いを支えあうソフトウェアとしての地域の連帯を強化します。

一、 “自然資本をより豊かにします”

【自然資本】

私たちの事業と生活を支える自然を守り、美しい景観を再生していきます。

Ⅲ. 各社で「グリーン経済宣言」お考え下さい

【ひな形】

〇〇〇株式会社 グリーン経済宣言

《目指す姿》

自社の目指すべき方向性・方針等をお書きください

- ・ 2030年や2050年、自社が目指すべき姿をイメージしてみてください。
- ・ 社是・経営理念やパーパス（存在意義）、企業の今日までの歩みも反映させて考えることをお勧めします。
- ・ 笑顔ある、健康な、持続可能な、グリーンな、等。

《行動宣言》

方向感を示すチャレンジ目標等、項目別にお書きください

「グリーン・持続可能性」を企業の中核に据えること、中長期の視点を持つことが大切です。

別途、詳細なチャレンジ目標やロードマップを作成するとより使いやすくなります。

2021年〇〇月

〇〇〇株式会社

*本【ひな形】は、宣言を作成するにあたりイメージを示させていただいたものです。

各社においては、自由なフォームで宣言してください。

*宣言書を作成することだけを目的とせず、意識改革や行動変容につなげてください。

IV. 各社で創る「グリーン経済宣言」への参考

【具体的にどういふことを心がければ良いのか：アイディア集】

- 人々の健康や安全に役立つものしか作らない、売らない。
- 環境を破壊したり、汚すようなことはしない、使わない。
例) プラスチック包装は原則として使用しない。有害な化学物質は使用しない。ゴミを発生させない。農業は有機など、持続可能なものにする。
- 気候変動を防止し、気温上昇を 1.5 度未満にするための行動をする。
例) エネルギーはなるべく自然エネルギーに早期に切り替える。できない部分はオフセット等でカーボン・ニュートラルを目指す。
生産工程や建物はエネルギー効率を徹底的に良くする。
- 資源とお金を地域で循環させる。なるべく地域内で調達し、地域で作る。
- 地域社会のつながりを弱めるようなビジネスはしない。
- 誰もが安心して暮らせる仕組みを作る。
- 安定的な雇用を提供し、誰もが生活の心配をしなくても良いようにする。
- 地域で作られた安全なもので、大きなお金をかけずに暮らせるようにする。
- 災害が発生した場合にも、生活が立ち行かなくなる人が出ないようにする。
- 研究開発と人材、そして未来につながることに投資する。
- 社内外で教育に力を入れる。社員だけでなく、地域の人も育てる。
- 一社だけではできないことでも、協力することで実行する。
- 自然環境を守り、回復させる。
- 美しい街並みと景観を守る、再生する。

【具体的な事業案（例）】

- 再生可能エネルギー共同組合（地域で作る、地域で使う。自治体新電力など）
- 有機農業の推進と普及（学校給食、社食等から広げる。食料自給。食べられる校庭）
- 青空市の整備（地域で作られた有機食材ほか）
- 住宅やオフィスの断熱改築（省エネ、脱炭素）
- 滋賀の自然景観とマッチした、歴史とのつながりを感じさせる美しい街並み作り
- サードプレイスのある商店街作り（e.g. ランドリーカフェ、ギャラリー、塾、工房…）
- Buy local 運動（地域の会社や商店から優先して買うことで、滋賀の中でお金を廻す）
- ワークシェア（特に母子家庭）を中心とする フレキシブルな働き方の普及（障がいのある方も含めて、あらゆる人が働きがいのある仕事をできる）
- 誰もが学べる寺子屋の推進（子どもから大人まで、誰でも、いつでも、好きなときに高度なことまで学べるように）
- テックハブ（新しい技術を共同で開発しやすい環境）の整備（e.g. イノベーションハブ）
- ベンチャー企業の支援（開発、マスプロ、販売、ファイナンス等の支援）
- 様々な背景の出身者が共存して力を発揮できる多様なコミュニティ作り
- e-Government の推進（企業活動や市民活動がスムーズになるように行政を変える）
- 地域通貨の開発と流通
- 自動運転 EV と自転車を中心にした持続可能ですべての人に優しい交通の整備
- 自転車で動きやすい街づくり（15 分都市、自転車道、シェアバイク）
- 滞在型ツーリズム（アグロツーリズム、ボランティアツーリズム、アーティスト・イン・レジデンス）
- 古民家と街並みの再生（レストラン、宿、ギャラリー、各種ハブ・・・）

V. バックキャストिंगのための付録

【人と自然が交わる2050年の滋賀の想像図】

2050年の滋賀では、人々が日々の生活に必要とする食べ物やエネルギーは、ほぼ自給できるようになっています。働いて稼いで、そのお金で消費するのではなく、本当に必要なものを得るために働いているので、必要以上に労働に追われることはもうありません。しかし、それは最低限の、あるいは清貧の生活を強いられるということではありません。家屋のエネルギー効率はとても良いので日々の生活は快適ですし、多くの人が身体を動かす仕事や活動もしているので、健康にも良いのです。

自動運転の電気自動車を誰でも簡単にシェアすることができるので、子どもからお年寄りまで、いつでもどこでも安全快適に移動することもできますし、交通事故もほぼなくなりました。もっとも子どもや若い人たちは、シェアバイク（自転車）や徒歩で動き回るの方が好みようです。

日常的に身体を動かし、身の回りで育った季節の新鮮な食べ物をいただいているので、健康状態はとても高く維持されています。たとえ一時的に体調が悪くなったとしても、ゆっくり休むことができますので、身体は自然な免疫力でちょっとした不調は回復できることを皆が理解しています。もちろん大きな怪我や病気になったときには、高度で専門的な医療も利用できますが、過度に病院に頼る習慣はもはや過去のものです。一方、子育てやお年寄りのケアは、昔とは比べものにならないぐらいにきめ細やかです。地域全体で支え合うことが当たり前になっているので、安心して子育てができる環境となっているのです。その結果、人口も適正なレベルで安定してきました。

そして、学校の様子も随分変わりました。もちろん相変わらず子どもたちは学校に通っていますが、学年や教科という考え方はとても緩くなっています。それぞれの好みにあわせて、好きなことを探求するよう、教育が大きく変わったのです。その結果、勉強に興味を持つ子どもたちが増え、向学心も学力も高まりました。これは大人も同じです。勉強したいと思ったとき、必要性を感じたとき、誰もがいつでも学校に戻ることができます。そもそも学校も、公的なもの以外に、民間の自由な学びの施設や機会がたくさん利用可能となっています。オンラインで世界中のクラスに参加することができるので、そこで興味をもって海外に飛び出す学生も多くいます。

もう一つ大切なことは、小学校や中学校には畑が併設されており、地域の様々な立場の方々が学校を訪れることです。子どもたちは有機作物を自分たちの手で作り、食べるのが当たり前になっていますし、先生が知らないことも詳しい方から直接教えてもらえます。退職した方々にとっては、学校で子どもたちに自分の経験を分かち合うことが大きな生きがいになっているようです。

仕事はとても多様になりました。工業的な大量生産もまだ行われてはいるのですが、そうしたことはほとんどすべて機械がしてくれます。人間は創造力が必要なことや、人に接することなど、より細やかな「人間らしい」仕事に従事することが普通になっています。それはいずれも定型的ではないので、仕事の種類や働き方はとても多様なのです。大量生産された工業的なものよりも、手作り

の味わいがあるものを好む人が増えたことも、この傾向を強めています。いわゆる職人さんの仕事が高く評価され、地位も再び高くなっています。

高度な製造業・モノ作りを支えているのは、そうした状況だけではありません。滋賀県内のいたるところにテックハブと呼ばれる、最新の技術を利用できる施設があり、誰もが自由に使うことができます。ちょっとしたアイデアがあれば、それを簡単に形にすることが可能になっているのです。技術を指導してくれたり、製品化をサポートしてくれたりする人や組織もあるので、ベンチャーが次々に生まれるのもいまの滋賀の特徴です。日本どころか、アジアの技術開発のメッカの一つとされているぐらいです。そのようなわけで、滋賀には今や世界中から多くの若者や技術者が集まって来ています。豊かな自然の中で、質の高い暮らしを楽しみながら、新しいモノ作りに挑戦し、それを事業化することができるからです。

けれど、滋賀のモノ作りのもう一つの特徴は、徹底的にグリーンにこだわっていることです。どんなに儲かることでも、先端技術の応用で魅力的なことでも、環境や社会に良くないことは許されません。逆にそういう点に魅力を感じる技術者や投資家は、皆、滋賀を目指すのです。例えば、以前は「廃棄物」と呼ばれていたものも、今では新たな原料として活用されています。ですので、滋賀にはもう廃棄物問題はありません。そもそも、一つのものを丁寧に、なるべく長く使う方がカッコ良いのですから、用済みとなるモノははるかに少なくなっているのですが…。

世界中の人々が滋賀に惹かれるのは、そうしたモノ作りだけが理由ではありません。むしろ多くの人々は、美しい自然や街の景観を求めてやって来ます。けれどもここでも滋賀は工夫しています。環境や社会に悪影響を与えることがないよう、一時的でも滋賀の「住民」となって、滋賀の生活を楽しみ、そこに学ぼうという人を歓迎しているのです。そしてまたそうした人々から住民が学ぶことによって、滋賀の社会はさらに多様になり、今なお進化しています。滋賀の自然や過去からつながる文化を大切にしながらも、新しいことをどんどん取り入れて変化を続けているのが今の滋賀なのです。

考えてみると、滋賀の豊かな自然がもっとも損なわれたのは 20 世紀後半から 21 世紀初頭にかけてでした。しかし私たちは既にそこから脱しています。滋賀経済同友会の活動がそうした変化の原動力となって来ましたが、特に 2021 年の「グリーン経済宣言」は大きなきっかけになりました。利益を生み出すためのビジネスから、地域と自然を豊かにして新たな価値を生み出し、何より住む人に優しいビジネスに専念することを企業人が決めたからです。昔以上に豊かな自然を目指して、滋賀の美しい自然と街の景観を再生する中で、文化や生活の質を高くできたのはそのためです。そのことに魅力を感じて国内外から多くの人が訪れ、中には移住する人も増えており、その結果、再生はさらに加速しているのです。人と自然が交わることで、そしてそれを産官学の垣根なくあらゆる主体が協働することで、滋賀はこれからもさらに豊かで魅力的になっていくことでしょう。

※これは講師の足立氏が想像する 2050 年の姿です。皆様もどうぞご自分で 2050 年を想像してみてください。

<研究会の実施結果>

■第1回 9月14日

演題：「グリーンディールでどんなビジネスを作るか？」

講師：サステナブルブランド・プロデューサー 博士（理学）
株式会社レスポンスアビリティ 代表取締役 足立 直樹 氏

ディスカッション：サステナブルブランド・プロデューサー 博士（理学）
株式会社レスポンスアビリティ 代表取締役 足立 直樹 氏

公益財団法人淡海環境保全財団 環境企画員 菊池 玲奈 氏

■第2回 10月26日

演題：「世界と滋賀のつながりを起点としたローカル・グリーン・ディールの必然性と、企業にとっての意義・価値」

講師：株式会社イースクエア 共同創業者
リーダーシップ・アカデミーTACL 代表
NELIS-次世代リーダーのグローバルネットワーク共同代表 ピーター D. ピーダーセン 氏

ディスカッション：ピーター D. ピーダーセン 氏

サステナブルブランド・プロデューサー 博士（理学）
株式会社レスポンスアビリティ 代表取締役 足立 直樹 氏

公益財団法人淡海環境保全財団 環境企画員 菊池 玲奈 氏

■「滋賀・グリーン 2020」オープンセミナー 11月24日

演題：「コロナ禍にみる自然共生社会の意義」

講師：国立研究開発法人 国立環境研究所 生物生態系環境研究センター
生態リスク評価・対策研究室 室長 五箇 公一 氏

■第3回 12月2日

演題：「滋賀のグリーンディールをどう進めるか？」

講師：サステナブルブランド・プロデューサー 博士（理学）
株式会社レスポンスアビリティ 代表取締役 足立 直樹 氏

ディスカッション：サステナブルブランド・プロデューサー 博士（理学）
株式会社レスポンスアビリティ 代表取締役 足立 直樹 氏

公益財団法人淡海環境保全財団 環境企画員 菊池 玲奈 氏

■第4回 令和3年2月1日

演題：「滋賀・グリーン経済宣言」について

講師：サステナブルブランド・プロデューサー 博士（理学）
株式会社レスポンスアビリティ 代表取締役 足立 直樹 氏

ディスカッション：サステナブルブランド・プロデューサー 博士（理学）
株式会社レスポンスアビリティ 代表取締役 足立 直樹 氏

公益財団法人淡海環境保全財団 環境企画員 菊池 玲奈 氏

■第5回 3月4日

演題：「人と自然が交わる滋賀・グリーン経済宣言」について

講師：サステナブルブランド・プロデューサー 博士（理学）
株式会社レスポンスアビリティ 代表取締役 足立 直樹 氏

ディスカッション：サステナブルブランド・プロデューサー 博士（理学）

株式会社レスポンスアビリティ 代表取締役 足立 直樹 氏

公益財団法人淡海環境保全財団 環境企画員 菊池 玲奈 氏

<参考>

■通常総会 7月13日

演題：「気候変動がビジネスをどう変えるのか」

講師：国連環境イニシアティブ・特別顧問／WWF ジャパン会長 末吉 竹二郎 氏

■夏季懇談例会 8月6日

演題：「デジタル・トランスフォーメーション（DX）の本質とは」
～デフレーミング概念を手掛かりに考える～

講師：東京大学大学院情報学環 准教授 国際大学グローバル・コミュニケーション・センター
主幹研究員 博士（学際情報学）高木 聡一郎 氏

■秋季懇談例会 9月15日

演題：「できること できないこと」

講師：茶道裏千家 家元 千 宗室 氏

■忘年懇談例会 12月8日

演題：「水と持続可能な地域の未来」

講師：東京大学 総長特別参与 大学院工学系研究科社会基盤学専攻教授
教授 沖 大幹 氏